
遠い約束のその先に

椎葉つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い約束のその先に

【著者名】

椎葉つかさ

N5355W

【あらすじ】

ライトノベルの短編小説です。

『ねえ、描きりをしよ?』

これは、遠い日の記憶。

『え、ほんとう?ほんとうにしててくれるの?...』

何度も見て、擦り切れそうになつてこいる出来事。

『え、ひとつ。それじゃ、指をからめて、いつ...』

夢にまで見る、悲しい過去。

『描きりげんまんウソついたらはり千本の一ます、指切つたつ』
いつも夢はここで途切れ。終わりを僕に見せつけるんだ。

『かずき!...』

彼女の声が、耳に届く。

『ねえ、かずき?』

なに?』

『ねえ、ねえつてばつ?...』

? なんなの?』

『こたえてよつ、かずき!...』

.....ああ、そつか。僕は、滑り落ちたのか。

『ねえ、ねえつてば...』

全然、体動かないや。

『かずき!...』

.....塗れつ。守れなくて!めぐね。

『.....』

あれ?なぜ、なんて言つてゐの?聞こえないよ、わあ。.....ねえ、
ひさか!

声にはね起きると、そこには自分のベッドの上で。

「もう、何で自分から誘つといて寝坊してんのを」

傍りには、淡い群青の浴衣を着て、長い黒髪をボーダーティルにし

たさやが居た。

「？ どうしてさやがいるんだ？」

「なこを言つてんのさ、一樹は」

さやは不満げに唇を尖らせる。それから人差し指をひとつ立て、

「問題。今日はなんの日で、今は何時でしょう？」

「え？ ……あ」

思わず間抜けな声が出た。

今日は八月一日、夏祭りの当日だ。

あの日の約束を果たそうと、画策してきた日々の本番でもあった。

「やつと思いついた？」

さやは僕の計画を露とも知らず、やれやれと肩をすくめている。

「あ～、ごめん。寝過ぎした」

時計を見ると、既に夕方の六時。どうやら、明け方まで続いた祭りのセッティングの所為で、爆睡してしまっていたらしい。

「もう。そつちから誘つてきとこで寝坊つてどうなのさ、どうなのよ？」

「「「めん。それで、どうしてさやはここに？」」」

「どうしてって、一樹が迎えに来てくれるっていう話だったのに来ないから、私がわざわざ来てあげたんじゃない。そしたら一樹のお母さんが、まだ寝てるから起こして来てって……。だから仕方なくよ、しかたなくつ」

「そつか。ありがと」

「べ、別にそんなことはこいけど……」

彼女は照れくさいのか、そっぽを向く。僕はポリポリと頭をかくと、ベッドを降りた。

そっぽを向いている彼女はと、彼女は僕の幼馴染で。……遠い日に指きりをした、女の子だった。

「と、とにかく、玄関で待つてるから」

彼女はそう言い残し、パタパタと部屋から出て行つた。

「……変わらないな、さやは」

今見ていた夢は、僕たちが小学生だった頃の出来事。

その日僕らは、一緒に夏祭りにでかけ、一緒に花火を見ようと指

きりをした。花火の時間が近づいて、神社の裏手、僕たちが偶然見つけた小高い丘を目指してる時。僕は足を滑らせて、坂から転げ落ちてしまった。

さやは泣くばかりで、僕の体は全然動かなくて。いつの間にか記憶が途切れ、次に気づいたときはこの村の診療所だつた。

僕たちが住むこの村は、山間の小さな村だ。だから、僕が怪我をしてしまったということだけで大騒ぎになつてしまい……。打ち上げ花火はそれ以来中止になつてしまつた。

それから何年も過ぎ、僕たちが高校一年生になつた今年。

今まで中止とされていた花火が、今年から有志が集まり再開する運びになつた。けれど、それはその時まで秘密にされていて、まだ一部の人しか知らない。祭りのプログラムには、打ち上げ花火の時間が青年部の太鼓披露と偽装表示されている。

どうして僕がその話を知っているかといふと、中止となつた原因の僕に、あえて有志として参加してくれないかといふ誘いがあつたのだ。昨夜のセッティングも、打ち上げ花火の最終確認だつた。そして僕は、思い切つて彼女を誘い、あの日の約束を果たそうと思つていて。もしも果たされたなら、その時に告白しようと企む僕もいた。

「一樹、まだなのー？」

「おう、今行くから」

僕は手早く準備すると、急いで玄関に向かつた。

祭りは盛況で、射的や金魚すくい、カステラやりんご飴などの屋台が立ち並び、楽しい時間はあつという間に過ぎていつた。そして、青年部の太鼓の時間が近づく中。僕はさやを連れて、神社の裏手、小高い丘の上を目指して歩いていた。

「浴衣、歩きにくそうだけど大丈夫？」

「大丈夫だよ？子供の時は登るだけで大変だったけど

彼女はくすっと笑う。多分さやも昔の事を思い返しているのだろう。あの時と違うのは、さやが浴衣を着ている事と、さやの手を握り、僕がリードしている事だらうか。

「……」

時折さやが、僕の手をぎゅっと握つてきては、僕を不思議そうに見上げてくる。僕はその度にさやの手を強く握り返し、丘の上を目指した。彼女は何も訊かずに、僕の後をしっかりと付いてきてくれ

ていた。

「……つい、たね。 よりやく」

せやは丘の上にあつた、ちよつびと大きな丸い畳に座り、ぽつつと零した。僕も彼女の隣に座る。

「ようやく、ついたよ」

単純に丘の上に着いたという事と、あの日、果たせなかつた約束の事を重ねて応える。

「花火、見れたら良かつたんだけど……。こめ、んね。私のせい、でつ」

どうやらせやも、同じ思いだつたらし。

「「」めん、つて、なにが？」

「……えつ、く」

せやはこれから始まる花火を知らない。だからだろうか?決して変えられない過去に後悔す

るよつに、静かな嗚咽を漏らしていた。

僕とさやの中にいる、消えない傷。僕はそれがどんなモノか分かつていて。だからこそ、泣いている彼女にこの言葉を投げかける。

「どうして、泣いてるの？」

「ツ……」

何故か僕の心は風いでいて、すらすらと言葉が浮かんでくる。

「えつ、くつ……」

「僕はさやと一緒にいれて、ずっと樂しかったんだ」

さやは静かに泣いていて。けれど僕は、言葉を紡ぐ。

「困つたりもしたけれど……。樂しくて、愉快で、面白くて……それでいて、とても安心できたんだ」

「……」

「わがままかも知れないけど、さ。僕は、これからもずっと一緒にいたいんだ」

これが僕の、素直な気持ち。

「ねえ、さや」

「……」

「僕と、付き合ってください」

「でもう、わた、しのせ

「ドン、ドン、ドン、ドン」

痛みを伴つ言葉は、それ以上の安らぎをもつてかき消された。

打ち上げ花火が、始まったのだ。

「……」

彼女は夜空に浮かぶ大輪の花に目を奪われ、文字通り言葉をなくす。

「ドン、ドン、ドン」

彼女はそれを呆然と眺めていたものの、はつと思い出したように僕の顔を見た。僕は、約束は守れたんだよ、という代わりに、彼女の目を見て頷いた。彼女の頬は涙に濡れていたけれど、照れくさそうな微笑みを浮かべて、おずおずと、僕に右手の小指を差し出してきた。

僕も右手の小指を差し出して、互いの小指を絡める。

そして二人合わせるように、あの日の言葉を繰り返す。

「」

その言葉は、花火の音に書き消されてしまったけれど。僕たちは、指を絡めたまま笑いあつていた。

花火が終わって、丘から降りて、屋台の通りを歩く道すがら。僕はふと思いついて、ちょっとした意地悪をすることにした。

「ねえ、さや」

「なに?」

「どうして、泣いてたの?」

「」

彼女はその言葉に固まる。なんとも恥ずかしそうに俯いて。「嬉しかったから、かな」

と、精一杯の強がりを言つもんだから。僕が声を上げて笑つて……。彼女の顔が朱に染まつたのは、言つまでもないだろう。

04（後書き）

そろそろ季節は秋。赤とんぼを見かけるようになりました。

このお話は、甘い空気というか一人の空間といつか、そういうを短編で表現したらどうなるのだろう？ といつ疑問から書き始めたお話です。

いかがでしたでしょうか？ 「甘い…！」と感想を持たれたなら、私の勝ちです（何が？）

では、今回ほしの辺で。また他の小説でお会いできればと思っています。それでは、ほしめでお付き合いくださりありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5355w/>

遠い約束のその先に

2011年9月9日03時16分発行